

高等学校におけるこれからの地理教育の可能性

－「地理資料」とストーリー性の復権－

近藤 裕 幸*

I. はじめに

高等学校における地理教育（「地理A」・「地理B」）は、その不振が言われてから久しい。「地理」の履修者数は減少し、地理をカリキュラムにおいていない高等学校もあり、さらには入試科目においても地理を設定していない大学が珍しいことではなくなった。

その不振を払拭するため、つまり地理を履修する学生を増やすためにはどのようにすればよいだろうか。例えば、地理学の有用性をもっと雄弁に語るべきであろうか。それはなかなか高校生の気持ちには届かない気がする。具体的にはどういうことか。よく耳にするのは「歴史（日本史・世界史）のほうがおもしろい」、「二次試験の科目にないため地理は大学受験に不利なので選択しない」といった高校生たちの声がある。そういった声に耳をかたむけ、問題解決の糸口を見いだす必要があるだろう。

そこで、本稿では地理教育と歴史教育とを比較し、そこに見えてくる地理教育における「ストーリー性」というキーワードを使いながら高等学校地理教育の今後の可能性について述べていきたい。

II. 地理教育の特徴

1. 羅列・網羅的な授業内容

たしかに、歴史（日本史・世界史）にはストーリーが豊富にあり、感情移入もしやすくおもしろい。

豊臣秀吉の出世ストーリー、幕末の志士たちの倒幕ストーリー、バルチック艦隊を撃破するまでの息をのむような日本海海戦のストーリーなど、数え上げればきりが無い。

しかも歴史のストーリーはわかりやすい。歴史はA→B→Cと話が進む。歴史では時間的な因果関係が問われるからである。例えば、どうして頼朝は鎌倉に幕府をひらいたのか？（B）その前提のAとして頼朝が伊豆に流されていたことと同時に、関東の人々との交流があるなどの前提条件がある。次に、朝廷に取り込まれないように京から距離を置き政治を行っていく（C）。このように出来事がつながっていくのが歴史教育である。ストーリーを重視していかなければ成立しないといってもいい。過去に起きた出来事を順序よく書き留めていく、まさに物語なのである。だからわかりやすい。

一方、地理にストーリーはないのであろうか？そのようなことはない。自然とともに人々がどのように歩んできたのかというストーリー、自然をいかに克服してきたのかというストーリー、逆に自然の前に屈服せざるをえなかったストーリー、どうしてその場所に工場がたてられたのかというストーリー、どうしてそこに商業地が展開しているのかというストーリー、どうしてその地域で牛を飼っているのかというストーリーなど無数にある。

ただ、地理教育史をひもとくと、地理はストーリーがなくても教えることができたことが

* 愛知教育大学

わかる。否、教え込むことができた。地理という科目(教科)が網羅的、羅列的であると明治以降ずっといわれ続けてきたことが、その証左でもある。

2. 情報過多と原因判別の困難性

さらに、歴史はたいていの場合すでに教える内容が取捨選択されて話の構造がほぼ固定されている。小学校で地域の歴史を学ぶことはあるものの、原則日本国中で共通の内容を扱う。つまり、教科書に掲載されていることは大筋で固定されている。

一方、地理はまさに現在の事象を主として対象とするために、観察者にとってさまざまな情報が目にとびこんでくる。しかも地域によって扱う内容は様々である。どうしてそこに茶畑があるのかという問いならば気象条件と関連づけたり郷土史をひもといたりすればその理由を説明できる。しかしながら、どうしてその地に鉄道が敷かれたのかを考える場合、地形だけから考えるわけにはいかず、政治的要素も考慮に入れなければならないこともある。純粋に空間的な思考法をとりたい地理学が政治学や経済学といったことに踏み込まなければならなくなってしまう。複雑な現実を多面的にとらえ、その原因を求めなければならないのである。

さらに、地理の授業(野外観察など)では観察者に圧倒的な量の情報が入ってくる。学ぶ対象の同時代性ゆえである。地理的な事象の原因を特定するためにはあまりにも多い、しかも判断に迷う要素を内在している。それが地理教育(地理学)の醍醐味といえはその通りなのだが、学校の科目として教えなければならない時、それを「地理の見方考え方」といわれても、地理的思考に不慣れた教員にとっては戸惑うだけである。

したがって、地域の調査(身近な地域の学習)という単元は忌避される傾向がある。絶対的な正解とまではいけなくても、それらしい解答をその担当教員がみつけれればいいが、そう簡

単にはいかない。

その結果地域の特性をつかむという地理教育の究極の目的は印象論的なものになってしまうことすらある。ともすれば百科全書的に、自然・産業・村落などの事実が羅列することになる。しかも、その方法は百人百様となり、歴史のように教科書を使えば誰がやってもほぼ同じというわけにはいかない。

これらが地理教育上の指導に困難を伴う原因の一端ではないか。つまり、歴史は時間を追っていくがゆえに必然的に物語的でありつながりをもっているから理解しやすい。それに時間がたっているため事象が精選され整理されており物語として確立されている。一方、地理はその同時代性ゆえに情報はあり余るほど存在し、地理的事象の分布やその原因を見つけ出すのに時間がかかり、その結果と原因の関連性つまり物語性をみだせないまま、断片的な知識を教えることへとつながりやすいのではないか。

では地理教育の指導の克服にはどのようなものがあるだろうか。それこそが歴史教育とは違った意味でのストーリー性の復権である。その具体的方策として『新地理』の「地理資料」を用いることに求めたい。

III. 地理資料「オーストラリアにおける観光とその地域的性格」

この地理資料の企画は、地理学研究者の成果が学校教育に生かされることをめざして始められた。各論文は図や表が多く、教育現場での利用を前提にした構成になっている。教科書の内容を越えた専門的内容もみられるが、内容は読めば理解できるものが多い。

読めばわかるということは、羅列的ではなくストーリーがそこにみられるということである。「AだからAなのだ」ではなく、「AだからB、BだからC」となっている。ただ、問題なのはこのままでは授業にならないということである。ではどの程度まで手を加えれば高校生用の教材となるのであろうか。具体的に試行したい。

1. おもな内容

今回取り上げたのは、菊池俊夫(2009)の地理資料「オーストラリアにおける観光とその地域性格」である。おもな内容は、観光がオーストラリアの重要な経済活動の1つであることが明白であるにもかかわらず、高校地理の学習では自然環境の特徴や農牧業、あるいは地下資源の分布が中心となり、観光の扱いは相対的に少ないため、主要産業である観光に焦点をあててオーストラリア観光の地域性格を明らかにするという論旨である。なお、紙幅の都合上、図については省略することをお断りする。

2. 構成

「1はじめに」のあと、論文は数枚の図を用いながら、次のように展開する。

a)「2 オーストラリアのインバウンド観光」：「インバウンド観光」とは、オーストラリアを訪れる外国からの観光客のことであり、具体的には、2008年にはオーストラリアを訪問した観光客は国別に見ると、ニュージーランド(111万人)、イギリス(67万人)、中国(58万人)、日本(46万人)、アメリカ(45万人)、シンガポール(27万人)、韓国(22万人)、マレーシア(17万人)、ドイツ(16万人)、香港(14万人)となっている。

b)「3 オーストラリアにおける観光資源と観光客のまなざし」：訪問地別の国際観光客の数が図示される。具体的には、シドニー(205万人)、メルボルン(102万人)、クイーンズランド(79万人)、ゴールドコースト(79万人)、ブリスベーン(72万人)、パース(48万人)となっている。

さらに、国内観光客と国際観光客の訪問先の違いが示される。オーストラリア人観光客は大陸東岸の主要都市に集中し、都市に近接した観光地を好む(都市近郊のレクリエーション空間を好む)ことが説明される。その一方で、国際観光客は主要都市とともに自然資源を主体とする国立公園にも及んでいる(都市景観とともに

豊かな自然資源)ことが述べられる。

c)「4 オーストラリアにおける自然資源の観光利用」：図から、オーストラリアの53%が年間降水量400mm以下の乾燥地であり、人口の90%が800mm以上の湿潤地域に居住していることが示され、その都市の集中箇所と国立公園の分布が重なることが述べられる。湿潤地域は都市開発によって自然資源が多く失われていった歴史があり、それらの保護のために国立公園が設置され、保護と利用をはかっていったことが説明される。

一方の乾燥地域では、手つかずの自然が数多く残され保護を必要とするものが少なく、さらに文化的価値のあるものも少ないため、国立公園の数が少ないと述べられる。

d)「5 オーストラリアにおける主要な観光地と資源利用の特徴」：最後に著名な観光地の例が取りあげられる。最初に、ウルルーカタ・ジュタ国立公園の事例(乾燥地域の自然資源の観光利用)が図で説明され、外国からの観光客が60%、最も近いアリススプリングスから450kmであり、その地理的隔絶性によってオーバーユースを抑制していると説明される。

次に、カカドゥ国立公園(湿潤地域の自然資源の観光利用)が事例として取り上げられる。この地域は、ノーザンテリトリー北部にあり、自然景観と多様な動植物、アボリジニの文化遺産があり、外国からの観光客が40%を占める。環境保全と鉱山開発(ウラン)と観光利用の調整が必要であると述べられる。

最後に、グレートバリアリーフ海洋公園(湿潤地域の海洋自然資源の観光利用)がとりあげられる。ここは全長2,300kmに及ぶサンゴ礁で、域内に22の国立公園があり、外国観光客は全体の20%、研究地区、保存地区、一般利用地区、緩衝地区などこまかく分けられていること図示される。

以上が論文の概要である。では、オーストラリアの観光は、高校生が用いる受験参考書や教

科書ではどのような取り扱いになっているのであろうか。

IV. 受験参考書と教科書での取り扱い

以下、オーストラリアについて、参考書（武井・武井，2010）や教科書（東京書籍株式会社，2010）ではどのような扱われているのか、主たる内容を抜粋する。

第1表のような内容になっており、参考書および教科書では大筋で重なっている。ただ、教科書において観光の記述はみられるが、その際地理的見方考え方を用いているかといえば、そうではない。菊地が述べたように、高校地理の学習では自然環境の特徴や農牧業、あるいは地下資源の分布がやはり中心となっていて、しかもオーストラリアの観光地が、グレートバリアリーフである、カカドゥであるといっているだけでは、地理教育が羅列的であると言われてもやむをえない。やはり地理教育にストーリー性を取り入れることは欠かせない。

V. 「地理資料」の教材化

では、「地理資料」をどのように用いれば効果的と言えるだろうか。今回は、実際に教材化を試みた。本時の目標を、菊地の考えを尊重し、「オーストラリア観光の立地と自然条件との関わり、それぞれの観光地の保護管理の工夫が、地理的条件によって特徴づけられることを理解する」とした。

指導の方針としては、ある事象が「どのように分布」しているのかをみる。それからどうしてそのように分布しているのかの「なぜ」を問い、生徒に考えさせるというシンプルな形にした。

授業展開は第2表のようになる。

大きな変更点は、以下の2点である。

①図を使用する順番を変えたところがある。展開1はおもに観光客の行き先を述べ、展開2では国内観光客と外国人観光客の行き先が違い、その背景にあるものを考えさせるためにこの順

番にした。

②グレートバリアリーフは削除した。そのかわりにブルーマウンテンズ国立公園を大都市近郊の国立公園の代表、つまり国内の観光客の行き先の代表として採用した。その内容は、菊地俊夫・有馬貴之（2010）「オーストラリアの国立公園における環境資源の保全と利用の地域的性格」から取り入れた。

その中で「ブルーマウンテンズ国立公園（周辺の国立公園も含む）を訪れる観光客は、2007年現在、年間約2,700万人で、そのうち外国人は約270万人と全体の約10%である。国際観光客とは反対に、オーストラリア人観光客は約2,450万人と全体の約90%を占め、なかでも日帰りのオーストラリア人観光客が約1,700万人と観光客全体の約63%を占めている。日帰り観光に特化したオーストラリア人の多さは、ブルー・マウンテンズ国立公園の地理的位置と密接に関連している。この国立公園は、シドニーの西方80kmから120kmの位置にあり、シドニー大都市圏に隣接している。都心部からの鉄道や道路によるアクセスも良好であり、鉄道や自家用車で約1時間という距離はレクリエーションや余暇を気軽に楽しむ多くのオーストラリア人を引きつけている」とある。

また、展開3を、展開1と2の前に持ってきて、具体的なことから入っていくことも可能である。

ここまで準備ができて、ようやく50分の授業ができる。

VI. おわりに

たしかに「地理資料」は教材として十分に役に立つ。なぜならば、地理を教える際に見落としがちなストーリー性をそこに読み取ることができるからである。

ただし、そのためには適切に教材化される必要がある。地理資料を適切に教材化し公開すれば、地理のおもしろさや魅力は確実に伝わり、生徒たちを引きつけ、地理を専門としない教員

第1表 受験参考書と教科書におけるオーストラリアの取扱い

	受験参考書	教科書・東京書籍『地理B』
地域区分	メラネシア, ポリネシア, ミクロネシアなど	
自然	①台地状の島大陸…中部は曲降（自噴井が多い）・西部は安定陸塊（資源豊か） ②気候…東西性（東岸が湿潤, 内陸はステップ砂漠, 西南部に地中海性）	
人口分布と社会	①総人口2,000万人（人口密度2人） ②都市人口率91% ③人口の6%はシドニー・メルボルン・阿德レード・ブリスベン・パース・ニューカッスルに集中（東南岸） ④地方に学校は成立しにくい→全寮制でクラブがさかんになる。 ⑤医者・警察・郵便は飛行機が絶対必要→フライングドクターやフライングボリス	(1) 州都の発達 現在の州都がすべて港湾都市であるのは、海上交通を中心としていた時代の名残である／人口密度が低いにもかかわらず都市人口率が高いという特徴がある。 シドニーとメルボルンは都市圏人口が300万人以上で中枢管理機能が集中している／イタリア人街, 中国人街がみられる。 (2) 農村の生活 農家の人々は週に一回くらい町に買い物にくる。 (フライングドクターの写真あり)
白人の入植	アーサーフィリップは1788年, 囚人759人, 羊44頭, 牛26頭, 馬7頭をつれシドニーに上陸した。1851年に金ラッシュで人口増加。	アボリジニという先住民 1788年イギリスから1000人が入植した。 開拓はアボリジニの存在を無視してすすめられた。／1920年頃には約6万人になった（もとは30万人いた）。しかし現在は回復している。／イタリア・ユーゴ・ギリシャからの流入も多い／大都市人口の25%が他国生まれである／多文化社会への道を歩んでいる。
大牧場開拓の歴史	1830年代は牧羊熱で不法占拠が流行した。南部ではかれらをスコッターとよび大牧場主の呼び名にもなった。北部の港から内陸に牛を運ぶ人をオーバーランダーとよんだ。	
貿易	対英貿易が激減し, 輸入輸出とも米・日・中が急増。	(1) 市場の問題点 国内の市場規模は小さい／以前は垂直貿易（一次産品を輸出, 製品を輸入）／都市の位置も偏っている。 (2) 貿易相手国の変化 1960年頃までイギリス中心／輸出先は日・米・韓・中・ニュージーランド／太平洋地域とのつながりがつよくなった（その一方, イギリス連邦にとどまっている）／経済的に文化的にも太平洋地域でむすびつきをつよめている。多文化主義がそのあらわれである。
白豪主義	白豪主義は1901年に実現, 1979年廃止	1850年ゴールドラッシュにより移民が増加したので, 対立がうまれ移民を制限した／白豪主義が廃止されると一転してインドシナ難民を受け入れ始めた。
農牧業	農牧業の立地とその分布【頻出のため要注意】（という注意書きがある）	(1) 平坦で乾燥した自然 安定陸塊そのもの・中緯度高压帯にあり乾燥している（ワジなどがある） (2) 農家の規模と降水量 農家の規模や種類は, 降水量に大きく左右される／南東部の大都市近郊は果実野菜, 酪農が行われている／内陸部や北部では放牧が行われている／その中間には小麦栽培と牧羊が行われている／標準的な農家は2,000から3,000haで家族経営 (3) 輸出型の農牧業 農業人口は5%である／羊毛, 小麦, 肉は輸出の上位である
鉱産資源の分布	鉄・金・銅・石炭, 降水量との関係, ポーキサイトに注意。	鉱産物が輸出の上位を占めている／露天掘りで採掘されている／環境保護の立場から大規模開発には反発もある。
観光		約480万人が年間訪れる／グレートバリアリーフやウルルは世界的観光名所である／北寄りの都市のケアンズ, ブリスベン, ゴールドコーストなどが玄関口となっている／クイーンズランド州の人口増加が著しい（退職者の移住, 観光産業従事者の増加, 沿岸部はリゾート地）

第2表 授業の展開例

	時間	教員の指導	想定される生徒の反応	観点別
導入	5分	①「外国人が行く日本の観光地といえばどこだろう？」 ②「では、オーストラリアの観光といえば、どのようなところがある？」 ③「世界的な観光地であるオーストラリアだが、観光地が『国立公園』と重なることが多い。その国立公園にはそれぞれ立地上の特徴がある。それを今日は考えてみよう」	①「京都」「鎌倉」「秋葉原」「スカイツリー」など。 ②「カンガルーやコアラがいるところ」, 「グレートバリアリーフ」「あの大きい石みたいなやつ」など。	【興味・関心】
展開1	10分	【国立公園の分布】 ①「〈図1〉をみて、どこの国の人がオーストラリアを訪れているだろうか？」 ②「さきほど『岩みたいなやつ』（エアーズロック）」と一言してくれたが、〈図2〉をみて、外国人観光客はどこを訪れているだろうか」 ③「では、その都市名をしっかりと確認してみようか。最低限必要な地名だからね」→発表させながら、地名を書き込ませる。 ④「では〈図4〉をみてほしい。農業と降水量は密接な関係は前回やったが、オーストラリアの国立公園の分布と降水量の分布について何か関係があるだろうか」（年降水量のラインを確認する） ⑤説明「湿潤地域には人口が集中し都市ができる。自然破壊を防ぐために国立公園として保護してきた」	①「中国」「日本」「アメリカ」と読み取る。 ②「南東のあたり」「シドニー？」と答える。 ③「ケアンズ」「ブリスベン」「ゴールドコースト」「シドニー」「メルボルン」「アデレード」「パース」「エアーズロック」など最低限の地名を確認する。(地図中に下線を引く) ④「800mm以上のところに集中している」、「降水量が少ないところはあまりない」などと答える。	①【資料活用：グラフを読む】 ②【資料活用：地図を読む】 ③【知識：最低限の地名を知る】 ④【資料活用：分布の状況を把握する】
展開2	15分	【国内観光客と外国人観光客】 ①「実は観光客といっても本国の人と外国の人とでは行き先がちよとちがっています。〈図3〉を見て、その違いと理由をグループで考えてみようか（5分）」 ②発表させる（いくつかのグループに）。 ③説明「本国人は大都市の近くで自然を楽しむために日常的なレクリエーションの場として国立公園を利用し、外国人は自然のなかで非日常的な体験をしたいようだ」	①〈グループ活動〉 ②生徒の発表「国内観光客は南東にほぼ集中（どちらかというとなより）、しかし外国人は北のほうまでしかも内陸にも及んでいる」など。その理由は「本国人は大都市好き？外国人は暑い所が好き？」「オーストラリア人は普段から自然に親んでいるから休みの時は都市に行きたがる？」など。	①～③【論理思考：分布の背景について考察する】
展開3	10分	【代表的観光地の特徴1：非日常編】（非日常的な例として） ①有名なウルル（エアーズロック）のスライドをみせたあと、小学館の図鑑のスライドをみせる。 ②〈図5〉の地形構造を示し、その成り立ちを説明する（簡単に）。〈図6〉をみせ、リアル感をだす。 【代表的観光地の特徴2：日常編】（大都市近郊の例として） ③ブルーマウンテンズ国立公園（シドニーから80km）の映像をみせる。 →大都市から近いため観光客が多くなり破壊されることにたいして配慮されていることを説明する。	①エアーズロックのスライドをみる。生徒は大きさを想像する。 ②岩の下の地形構造を知る。「地底深くつながっていることが驚異」などと言う。 ③スライドをみる。	①【興味関心】 ②【知識理解】 ③【知識理解】
まとめ	10分	【まとめ】 ①「では今日学んだことをノートに200字程度でまとめてみなさい」（5分） ②数人に発表させる。 ③発展課題として、「身近な観光地について、どのような人が訪れ、どのような維持管理がなされているのかを調べてみるのもいいね」という。	①生徒はノートにまとめる。（5分） ②生徒の発表「国立公園の分布には特徴があり、本国人は大都市近郊、外国人は非日常的な場所にいきたがる。国立公園の分布は地理的条件と深く関わっており、それぞれの保護策についても様々な配慮がなされている」などと書く。	①【知識理解】 ②【表現】

にとっても役立つものとなり、地理教育の裾野は少しずつ広がっていきと考えられる。

ひたすら「地理の見方考え方」の重要性を唱えても、地理教育に不慣れな教員にとっては、見当が付きにくいいため、教科書に書かれている内容を生徒に暗記させるということはこれからも続けていくにちがいない。

やはり、地図を用いて分布を把握させ、その理由を考えさせるという初歩的な課題にまず取り組むことである。その地理教育の原点に立ち返り、その実践の集積の上に地域性をつかむことができるのではないだろうか。歴史とは違った、地理教育のストーリー性を再確認することが求められている。

「地理資料」にとどまらず、地理学の論文の中には高等学校の授業で使うと生徒の興味をひ

くものが多くみられる。それらをうまく活用し、地理教育、地理学の魅力を伝えていく。第一線の地理学研究者と教員たちの共同作業が今後も引き続き求められることであろう。

文 献

菊地俊夫 (2009) : オーストラリアにおける観光とその地域的性格, 新地理, 57 (2), 44-55.

菊地俊夫・有馬貴之 (2010) : オーストラリアの国立公園における環境資源の保全と利用の地域的性格, 観光科学研究, 3, pp.41-55.

武井正明・武井明信 (2010) : 『新版 図解・表解 地理の完成』, 山川出版社, pp.295-297.

東京書籍株式会社 (2010) : 『地理B』, 東京書籍, pp.162-171.